

絵画の分類の中に具象絵画という言葉があります。「具象とは何の事、具象絵画とは」と改めて聞かれると「難しい事は分かりませんが・・・」そう難しく考えず、リンゴを描いて「リンゴの絵」という。机の上に敷き物があり皿やら籠やらがありその中にリンゴが飾られているとか、美女とか醜男がリンゴを持っているとか食っているとかでも「リンゴの絵」と言えます。リンゴという題名やイメージの話ではなくて、リンゴという物が在る、その在る物を描く、その物が具象なんだという事ですかね。

リンゴという具体的なものを、リンゴを意識して描かれている。描き始める時からリンゴを意識して、途中形が崩れたり歪んだり抽象化したりと、気持ちのうねり、感性が行きつ、戻りつ、というような事があっても、リンゴという具象は、リンゴの絵なのです。

仕事場で進行中の壁にかかった絵をボオーと眺めながら、「あれは河原の草木の絵」「これはピアノを弾く人の絵」「あれは人の顔」と自分の中では認識している、わかっているつもりが、いやいやそうではない、かろうじて自分だけが認識できるというぐらいに形がわからなくなってきている。“判じ物”“謎合わせ”ではいかんぞとおもいつつ、具体的な形やら色から遠ざかっている。ふと考えて、いっその事、無意味な色を、無意味な形を入れてみたらどうかと考えてみた。具象と言う意味を絶対的に大事に思って、その絶対を崩してはいけない意識しなくてもいいのではないのかなと“無意味”を考えてみた 試みたが成功とまではいかない。我ながら、思いながら、言いながら、違うと否定もしてみたり、何と貧弱な感性か。

9月になると涼しくなってきた。昼間の暑さも、身体がベタベタするという不快感が減ってきた。日が暮れると扇風機が涼しすぎ消してしまう。寝る時はタオルケットが欲しい。窓を開けたままで寝ているとひやりと寒い。

河川敷で「おお」と思ったのがトンボの出現。あれは「シオカラトンボ」というのかな。WEBで調べたがわからない。春にも秋にも発生すると書いてある。赤い、黄色い、灰色と色々あって、普段興味の無いものを俄かに調べてみても、どうもはっきりわからない。余談だがWEBの画像を見ていると、昆虫の写真はなかなか感動的だ。花にたかるハチやら蝶やらがたまたま撮れた事があるが、いざ撮ろうとカメラを向けて撮れた事が無い。スイスイどこかに飛んで行ってしまふ。皆さん多分苦労して撮っているのだろうね。

急にここ2.3日、トンボの姿をよく見る。デッカイ芋虫も歩いている。緑色のバッタ、茶色いバッタもいる。今年は河原で蛇を見なかった。この辺りの自然界では蛇君減ってきているのかな。

昔、我が家にヘビが棲み付いていた。2メートルもありそうなデッカイ青大将。洗濯機の傍で、ホースが外れていると思ったら動いた。ゾクとしたね。スルスルと下水に消えて行った。もうひとつは70センチぐらいの華奢な縞蛇くん。年に2.3回彼らの姿を家の中、木の枝で見た。何処に行ったのかももう見ない。

ついでの話、イタチも居たね。彼は我が家を棲みかにしていたのではないと思う。台所で家族と飯を食っている時に、網戸の破れからタッチ君そろりとしてきた。まな板の上に生の鶏肉の塊。我々との距離は2メートル。舌なめずりをしながらも、つぶらな瞳で我々と生肉を交互に見て、逃げるかいたたくか何秒か思案、ガブリと銜えて帰って行った。家族全員ニヤリとしながら見ていた。マンモスの時代なら、イタチ君もオレンチの食卓に乗っていたかな。

安威川にいと彼が居た。遊歩道を横切っている。草むらに隠れてしまうとよほど注意をして探さないと全くわからない。それはそうで虫君達は他の生物の恰好の食糧でまごまごしててそいつらに発見されたら、何の抵抗も無くぺろりと平らげられる。その芋虫君、百足（むかで）歩行でゆっくりと進む。いやいや本物の百足氏は百本ある足を身

体の外側に踏ん張ってボートの櫂のようにうねりながら波打ちながらパパッと走る。百足氏は結構足が早い。オレ噛まれては大変とパッと飛びのいて追い払おうとするが、つるつる壁の隙間やら小さな穴に逃げ込んで鳥肌だけが残っている。わが芋虫君はそんな敏捷さは無くひたすら愚直にゆっくりと前進歩行と見えるが彼にしたら上からも横からも発見されやすい場所から一刻も早く隠れる処のある場所に身の安全が保障されやすい場所に逃げ込みたいと、50本ぐらいの足を全速力で回転させているのだろう。オレが芋虫君やら他の虫達を発見するのはアスファルト舗装の上だけで、両側の草木の生い茂った中には何が潜んでいてもわからない。鳥は人や犬を恐れて水の中や水辺にいる。常連の鷺、鳩、カモ、川鶺、チャンぶくろ（これは何だろう。子どもの頃からこう呼び習わしている「チャンチャンブクロ、チャンブクロ、お前のおしりに火が付いた、早〜く潜って消してこい」と淀川のワンドに向かって囃していたが、どうも鴨科の鳥に思えるが・・・）。そしてすごいのが、年に1.2回だがカワセミにお目にかかる。カワセミを発見するとじっと止まって観察する、見てみると、ひょいと下の枝に飛び移り、ピシャッと水の中に潜ったと思ったらパッと出てきて枝にとまった。嘴と同じくらい大きさの小魚を銜えて、その小魚を空中で回転させてゴクッと呑み込んだ。人が来るとカワセミを指さして教えてあげるが極々興味を示す人と無関心の人が居るのは当然で他人の嗜好にオレの興味を押しつけてはいかんと分かっているのだが「見てみて」と興奮して指さしてしまう。話はそれだが芋虫君、遊歩道を横切るわずかな間に鳥にでも発見されたらその生涯は一瞬にして終わりとなるのだが鈍足の彼そう簡単に俊敏に逃げられない。遊歩道を横切り始める芋虫君の心境としては天敵にまる見えのまずい場所に来てしまったとねじり鉢巻きで大汗かいて前の叢めがけてまっしぐらに駆けているのかもしれない。

芋虫氏の将来と言っても昆虫への造詣が深くないオレ、変態、羽化等と言葉だけは知っているが卵と昆虫の間に日時はどれくらいで季節はいつでその間何処に棲んで何を食べるのかなんてそんなことは全く知らない。かの芋虫氏が将来どんな姿になって飛び回るのか、おそらく蝶か蛾だろうとは思うけれども、蝶にしても蛾にしても何千もの種類があつて顔も形も色も違う。今の芋虫からは想像もできない様な色や形になるのだろうとは思われるが、彼があと何日か後には姿を形を変えてどこかに潜ってぐっすりと眠りにつくのか、水の中でスイスイ泳ぐのは別の種類なのか。昆虫の調査研究は学者先生にお任せしてかの芋虫氏、姿を変えてカマキリのようなカブトムシのようなゲンゴロウのような水中肉食怪物になって、川の中池の中をわがもの顔に走り回り他の水の中の生きもの達に恐れられ怖がられ、畏敬の念に駆られるやら、侮蔑の眼で見られるやら、魚を食いオタマジャクシを食い、より大きな魚が来るとひょいと態をかわして石の陰やら草の陰でほくそ笑む。口やら角やら手足やら鋭い爪やらを相手に巻き付け叩き引っ掻き締めつけて相手の肉汁を体液を血液を吸い取り、残り滓の翅や毛や手足をぼいと捨てる。さあいよいよ羽化だという時が3年先、4年先、驚くなかれ彼は華麗なバタフライとなって鳥を恐れカマキリを恐れ蛇を恐れる、のかな。

ところで芋虫さんあなたはいつの時代が一番幸せですか、一番面白いですか、一番充実していますか。ハンターとして生物界に君臨し肉食を楽しんでいる時がいいのか、生殖のエロスの海をうたうた流れる時がいいのか。

0103 葛 110912

話しながらその方がずっと先生をやってきたとおっしゃる。中学校で理科を教えていたと、専門は、生物の先生です、生物の？植物です。植物採集が好きで若いころから出歩くと目に付いた植物を千切って取って持って帰って標本にしてと、そんなやつ等が家の中にゴたゴた在って、だからと言って棄てられず家の中には他の人から見れば屑やらゴミやらガラクタがいっぱいで、かと言って私にとっては一つ一つが可愛い宝ものでゴミの日にゴミとして捨てるなんてとんでもない、時々眺めて触って臭いをかいでそれらを楽しんでいます。75歳の元先生デッカイ腹を揺らせて楽しそうである。

植物の先生ならちょっと教えてください、というのは先日来気にいった草があってその草は何かなんという名かな
どういう仲間かなと思ひながら植物図鑑を引いてもわからないだろうしと。前回この文に“芋虫”で書いた、夏の真
っ盛りに元気に青々と生い茂る蔦状の草でそれこそ長さも10メートルくらいにもなる、葉っぱが手の平の大きさぐら
いに大きく、いやあ夏の盛りの、この暑すぎる夏に身体がぐったりするような熱気の中、彼は生き生き生い茂り・・・。
「葛」「あれが葛？吉野葛の葛・・・」まさかあれが真っ白けの葛粉の草、あれが吉野で売っている葛の本体と聞いて
びっくり。奈良の吉野に行った時に小袋に入った白い葛粉をみやげ屋で買ったが思ったよりも意外にも値が高いと思
った。いつの日か葛粉を作る映像を見て、ええこんなに手間暇かけて作るのかと驚いた。先生葛粉は葛の根から片栗
粉はジャガイモから共に澱粉ですよ、オロシガネですって水に晒して何度かするうちに出来ますよ。その映像では古
材木のような葛の根を砕いて細かくして水の浸けて汚い水を棄ててかき混ぜて濾して又水を入れて何日か待つて又濾
してかき混ぜてとそんな作業を何度も繰り返して何回目かに沈んだ粉は真っ白になっていた。

調べてみた。

葛粉は寒くて乾燥した所が産地。宮城の白石葛、静岡の掛川葛、福井の若狭葛とたくさんあるようだ。

葛は日本とその付近のアジア原産らしいが、他の地域に移植、鑑賞、化粧目的にもっていかれて「きれいでしょう、
葉が生き生きしているでしょう、砂漠緑化になりませんか・・・」と何十年かたって世界の有害植物、駆除対象植物ワ
ースト100の中の一つになったとか。（侵略的外来種といかめしい名だ）いったん生い茂りだすと、刈っても切つ
ても強力な根が根絶を阻んで駆除しきれず、天敵のいない外国でそれこそ生き生き青々蔓を伸ばし葉を広げガラガラ
の陽の下で謳歌している様が嫌われているとか。

葛根湯が彼の事とはまたまたびっくり。

オレの知らないことが世の中にはますます増えてくるとは・・・。

0104 膝が、いてて・・・ 130912

「跳べ！」「もっと跳びあがれ」コーチの宮本師。それと跳びあがって羽を撃った。最初の1時間ぐらひはランニ
ングから始まって横跳び斜め跳び、柔軟体操の後ラケットを持って素振り、それから羽が飛んできて右だ左だもつ
と大きくもっと早くと叱咤の声。と、こういう表現をするといかにもスポーツ選手が跳びはね身体を反らせて躍動す
る様が想像できるが、やっているのがこのオレだからそこはそう、いい加減に聞いて「また馬鹿が言ってるか」程度
に流してもらって結構ですぞ。

スポーツの世界、練習の時の事を幾多の人がその決意やらその辛さやらを語っているのを聞いた。勝負の世界、勝つ
か負けるかという白か黒か明か暗かに分かれ、同じチームの仲間、同僚家族、小さい組織、次の組織と順次大きくな
ってそいつがお前とどういう関係だと毒づきたくなるような人まで現れる。先日音楽関係の方と話していて、音楽を
やっている人らにもスポーツ選手と共通のマインドがあるものと了解した。一つの目的に向かって何人かが、一つ
の方向に向かってみんなが、共同作業、それこそ寝食を共にするという一体感は経験した事が無い。恐らくこれは仲
間で動く演劇や映画の世界にも共通するかもしれない。

夜といえども夏の体育館は日中に暖（あたた）められ温（ぬく）められ扉を開けて入った途端にムツとする暖気が身
体に纏わりつく。小窓を開けると風が入るが体育館の図体から比べていかにも小さい片開きの窓が2.3カ所では中の
大気はヒヨロリともしない。まず最初の素振りで汗が出始め、横に縦に羽を撃ち、上にもっと上に跳んで前に後ろに

よろよろ歩いて吐く息がハーハーゼーゼー。はい休憩はまだかなと思いつつも足がもつれ息が上がりシャツもズボンも濡れてきた。

ちょっと足を使いすぎたかなとなんとなくの鈍痛に湿布を貼って寝たが案の定“いてて”である。2年前の正月前にキヌチャンと日帰りて京都の愛宕山に行った。愛宕なんてと運動靴で嵐山の駅から歩いた。清滝から裏道を通って頂上を抜け水尾を迂回して嵐山まで歩いた。やや疲れたと朝起きたら膝が痛い。おかしいなあと思いながらもいつもの運動をして2日後ぐらいに激痛が来た。歩けない曲げられない・・・えらいことだと隣の整形外科に駆け込んだ。レントゲン写真を見ながら「でっかい骨だねえ、異状は無いからすぐに治るよ」と“かん先生”注射と湿布と痛み止めをもらってあくる日には歩けるようになった。「運動はそこそこに・・・」の注意も聞かず相変わらずの日々。この2年間、山から帰ると湿布を貼って。普段はストレッチ運動を欠かさず膝の曲げ伸ばし、屈伸とそのそり返り。福田さんがすりこぎのようなもので足から尻から擦るといい、棒で揉むといいという。だましましかもしれないが普段生活も運動も登山も楽しんできた。夏になって寝る時に布団もかけず薄着になって夜に冷えたのかやや調子が悪いなどは思っていたが、またまた“いてて”である。オレにとって腰と膝は要注意ポイントである。

今日は3日目、走ってみた。重いが徐々に治りつつある。いやいや助かった、治った、元に戻りつつあるようだ、でっかい骨さん頑張ってる、とエールを送る快さが身体を軽くする。1週間先には四国の山が待っている。

0105 運輸省陸運局 180912

「トモ〇〇ケン〇〇様、トモ〇〇ケン〇〇様、」とそのアナウンスをもう30回ぐらい聞いただけだろうか。トモ〇〇君は知人の自動車屋さんなのでこの窓口に訪れるのは日常茶飯事のことと思われるが、「何処にいるのか」と最初はキョロキョロ探したが、プロの事だからこの混みようを見て「これだけ混めば出来あがりは相当かかりそう」と読んで、別件をかたづけによそへ走ったのかもしれない。

今日は何日も前からここ陸運局の窓口にきて、車の名義変更をしようと決めていた。オレ様、厚かましく見えるかもしれないが至って小心者で、初めての場所、初めての事と、この“初物”には緊張する。車の事でこんなところに来るのは初めてだし、手続きをするのも初めてというわけで、武者震いである。何月何日何時に行くぞと気合を入れてやって来た。朝から雨が降っていた。台風が沖縄を直撃して朝鮮半島に向かったという。台風の影響で2,3日前から風がきつくなりだした。天気予報士の話では台風が日本の上を通過すると暖かい風が吹き、日本の下を通過すると冷たい風は入り込んで来ると言っていたが、彼の言うとおりに連日暖かい風がムウツと吹いてくる。アトリエの窓を夏と同様開け放つと、多少きつい風がカーテンを膨らませ、アトリエの紙クズを吹き散らす。暖かいとはいえきつい風は心地いい、快適空間になっている。

目的地は寝屋川警察のちょっと先、自転車圏内であるので当然今日も自転車。距離があるのでバテないようにとほどほどに鈍足に、傘をさしての走行である。緩い雨だが、傘をささずにいるとちょっと濡れるしと、傘を畳んだり差したりと年の功で厚かましい。

今までは車の事は車屋さんに任せてと金だけ払ってすませってきたが、なるほどこの建物には車関係の営業マン、繋ぎの服を着た整備工、そしてオレと同じような素人のにいちゃん、おっさん連。なんで日本国は車の事までかまいたがる、管理したがると難しい話は無し。車の所有、整備、税金と色々な仕事をしている模様。言葉も名義・変更・ユーザー・末梢とそれぞれに言葉が違って、オレは何をしたら、何をしに来たと何が何やら。ネットで「案内の人がいるから、教えてと言えれば気軽の教えてくれて、書類さえ揃っていれば10分もすれば完了する」と書いてあったのでまず

聞いた。「その窓口で印紙を買って向こう側のA棟に行って書類を提出してください」A棟に来るとまたまたわからないので相談員に「素人ですが・・・」と聞くと「これとこれとこれを書いて、ここに実印を押して提出してください」と簡単完結である。

たまたま前のベンチが空いたので座って待つ事10分。これはなかなかだなあと思い始めた。最初に書いたがアナウンスで「トモ○○ケン○○様」と彼以外に次々人の名前を呼んでいる。隣に座っているつなぎを着たあんちゃんもオレより前からずっと座って待っている。この混み方は相当時間がかかりそう、医者並だなあ、あせっても仕方がないし、動くわけにもいかないし、何か暇つぶしのできる物を持ってきたらよかった、カウンターののおっさん連も忙しそう、カウンターののお姉さんも愛想良く忙しそう、自動車屋と思われる兄ちゃん、おっさんもじっと耐えて待っている。立ったままで待っている人も相当いる。1時間以上待って車検証という紙切れ1枚を手にした。書類の不備があれば戻って出直すぞ、今日は一日かかっても終わらずぞと意気こんできたが、午前中に片が付いてまずはよしである。車はドアの修理に出してくれているようで4,5日後に取りに行くことになりそう。

図版はできたて、湯気のたってる絵、はがき3枚ぐらいの大きさ。

0106 人間行動学まがい 190912

先日待合室のホールのようなところで1時間以上もベンチに座って名前の呼ばれるのを待った。こういうことは久しぶりだと思いながらも、過去に有ったそういう場面が幾コマか思い浮かんだ。皆さんそれぞれ特異な経験をお持ちだろう。オレ、サンフランシスコの空港でひと晩朝が来るのを待った事が急に脳裏に浮かび上がったが、その時の心配、不安、睡魔は忘れてしまって、今はボオーツと床とベンチと照明が頭をかすめるなかで、フィリピーノの兄ちゃんと話していたのを思い出す、といっても何を話したかはそれこそボオーである。若いころは何事につけ待つ事は嫌なことだと思っていた。「え、1時間も・・・」「なんで、すぐにできないの・・・」と一言も二言も言える相手にはいい、言えない相手には頭の中で舌打ちの2,3回もした。最近では考え方生き方が変わって自由時間がもたらえた、好きな事ができると自分なりの“オタク”の世界にのめり込めるようになった。物事何でもかんでも予定通り思い通りすんなり進んで済ませてというのが理想的最適な時間の過ごし方かもしれないが、不都合、不合理、不確実等といつてめくじら立てるより曖昧なケシカラン時間が降って湧いて、反対に自分自身の回転がスムーズに行くことになるかも知れない。

人が待合室でずっと待っている様、動物も昆虫も同じように動き、集まり、話をして、それから御馳走を前にして順番を待つとか、人族にとっては少々下品な話だが生殖の順番を待つとか、そういう懈怠な動き時間が見られたら面白いね。動物君も昆虫君も、目的の為、食うため、寝るため、生殖のため、それだけの為に動くのはそれでいいとして、どこかでじっと仕様もないものを待っているなんて考えただけでも面白い。これは人間だけ行動とか、動物特有の行動きだとかの話は動物行動学の先生に委ねますが、動物も昆虫が、おとぎの世界そのままギターを弾いていたり・・・いやひょっとして、人族が知らないだけかも、と無駄話。

オレはオレなりに人の顔を見て座り方、立ち方、話し方を見て「お、兄ちゃん、立ち居振る舞いは粗野だけどその内面に深い悲しみと喜びを抱かえ、眉間の奥の脳が必死に自分を抑制している人かも・・・」「あのおっさんは一見頑固我がまま、なりふり構わず周りに文句注文を付けるが、彼の人生の大半は寂しさ侘しさに包まれ、本当はみなさんに謝り回りたい、笑顔で接したい、あの警声警号を変声機にかけて女子供の声に変え、聞かせて回りたい・・・」なんて勝手な事を想像したりしまして・・・。

携帯電話の普及が行動の一部を塗り替えつつありますね。みなさんその画面を食い入るように見つめ、指で押し撫で、会話以外の仕方で使う人が多くなってきた。ますますこの傾向が時代と共に増えていきそう。新しい携帯スマートフォン

オンは電話電信以外に、パソコンが持っている機能がどんどん加わり、本も、画像も映像も、音楽音声となんでもあり、それらの資料を修正、添削、編集、選択といろいろできて、通信でたくさんの人とやり取りしながらほとんど事務所に居ると変わらない状態で作業が進むような環境ができつつある。ベンチや喫茶店がミニオフィスに早変わり、なんていうと、ものを知らないお前さん、もっと進んでいるよと笑われるかもしれない。さらに時が経てばパソコン氏、知恵を貸してくれ、指示を与えてくれ、世の中の教訓を垂れ、導いてくれるやも。そのうち無いのは美人秘書とあったかいコーヒーぐらいなものかな。携帯を持たないオレ、勿論美人秘書が持てないオレである。

0107 水浴 260912

水浴というと天女が衣を木の枝にかけ水辺で裸になっているのを見た仙人が墜落するとか、村の娘が岩陰で沐浴するのを青年が覗き見て一目惚れするとか想像するでしょうが、今日の話はオレが山の清流で裸になって身体を洗う話ですぞ、と聞くと「つまらん」と閉じないでくださいね。

キヌチャンがいきなり「岡村さん、この辺で水浴びしませんか、川に飛び込んで身体を洗いませんか・・・」え！ここで、水浴び、裸になって、なんという事を言うのかと絶句したが、山を下っても風呂も入れないし、此処は今日一日誰とも会わない様な淋しい山、ましてこの時間に登って来る人もいないしと思いを巡らし、水浴びをすることに決めた。昔、澤山さんと南アルプスから降りてきて、二人で林道にリュックを下ろし服の上から崖を伝う水を浴び、タオルで隠しながらシャツやズボンを変えた覚えがあるが、その時は我が業界用語でいう“着衣”であった。業界用語とはおかしな話ですが、デッサンをする時普通は“裸”ですが、言葉通り服や布を着けたモデルさんを“着衣”と呼んでいた。

わっはは裸になって天女ごっこの糞オジンとはオレのことなり。「よし、ここで」川の水が早くない場所を見つけ下って行った。リュックを下ろし、靴紐をほどき、靴下を脱ぎ、シャツを、ズボンを、パンツをと脱いだ。まずは足から膝まで水には入り、タオルで頭を顔を背中を腹をと水を掛ける。「ツメテ、ツメテッテ」と叫びながら、またまた頭を顔を背中を腹をと水を掛ける。さすがに冷たく身体を浸ける勇氣は無く、何回も水を掛ける。冷たさに寒さにガチガチ震えながら身体を拭き、シャツにパンツにズボンを着けた。これは気持ちがいい、爽快だ、汗がひき、ベタベタの不快感が吹っ飛んだ。これなら“風呂いらず”である。カラスもこれをするはずだと納得。写真も撮ってもらったが、そんなもの見せるなと怒られそうなので、絵にした。

剣山は一昨年に娘と来た。ゴンドラに乗って降りたところから少々歩くと頂上に着く。なだらかで山岳宗教の施設がありたくさんの人がいた。今回はオオボラ橋から入った。登山口に紐が張ってあり「危険につき登山禁止」の紙が吊り下げられていたのを乗り越えて前に進んだ。ほとんど人が入っていない様子の谷筋を登って行った。左の川は2、3日前、沖縄通過の台風の影響で徳島県に大雨洪水警報出ていたが、おそらく大量の雨が降ったのだろう、水量も多く濁っている。落ちるとやばいという処を何カ所か過ぎ、踏み跡が無くなった。徒渉して登るとある。向こうに印を見つけこの辺りなら流されないだろうという処を探し、そこまで降りて、靴紐をほどき靴下を脱いでズボンを膝まで巻きあげた。軟弱な足の裏は小石を踏んで「イテテ」の連発である。ユルユルと徒渉して岸に上がって足を拭き靴下を着け、靴をはき、靴ひもを締めた。今回は先日来の膝痛が残っていたので、充分に楽しんだ。早く治さねば。

四国には剣山と石鎚山の二つの2000メートルの山がある。石鎚山は尖った山、剣山はなだらかだ。「熊出没」の看板があった。四国では熊が絶滅と思われていたが、定点観測カメラに熊の姿が写っていたというニュースを聞いたような気がする。いずれにしても熊君がいるとは嬉しい限りだが、会いたくは無い。

0108 雲の上の町 橋原-ゆすはら 270912

橋原という町には夕方まだ西陽が眩しく運転しにくい時間に着いた。なんと立派、なんと恰好がいい、隅々までデザインしている、とうい道の駅。このまま風呂に入って一献乾杯とはもったいない、この里、この森、この村を歩いてみたいと散策に出た。国道を右か左か迷う心が、左に行けと指すように思われて、車がビュンビュン走る国道を左へ歩き出した。少し行くと“川の道”とハイキング用の看板を見て左に進んだ。農婦が黙々と鍬で土を耕している。目が合って彼女が“ニコリのペコリ”としてくれたので、オレも“ニコリ”の“ちわ〜”四国に入ってから何処でも誰でもニコリのペコリとしてくれる、子どもも、おっさんも、若い姉さんも、年配の姉さんも、ニコリのペコリはいいものだ。ところが進んでいくとなんと元の場所に出たのにはがっかり、ただの迂回路だったのだと気を取り直して上を見上げると道があるので、今度は反対の右側を進んで、左へ180度Uターンして車が通れる様な道を上え、それ行けそれ登れと歩く。夕方の森は人一人なく下の国道の車のエンジン音だけが響くだけ。

昨夜山から降りてさあ乾杯という処でポツリと来た。そのポツリがほんの少々だったのでそのまま野外で、湯を沸かし、野菜を食い、豆腐を食い、ソーセージを食った。コップに焼酎を注ぎ湯を入れてと、陶酔がすぐ来た。

朝は昨夜の強い雨で全ての山も草も木も土も、じっとり水を吸って濡れている。が、うまいことにありがたいことに雨がやんでいた。どんより曇った空の間から陽の光が漏れると、枝やら葉に着いた水滴がキラリ。どんよりとキラリの繰り返し、山々に雲というのか霞というのか白いフワフワが幻想の世界を作る。アウトドアには雨は大敵、雨の日は何をしたらいいのか、湿る濡れる気が滅入る、冷たい心地悪いと情けなくなるが、雨の日の過ごし方を探求しなければ・・・。

話がそれましたが、この話は橋原に着く前の今朝の話ですが、林道を歩きだした話に戻します。“坂本竜馬脱藩の道”と何度も看板。それがどないした、竜馬をつまらんことに使うな、と悪態。そんなことまで商売にするな、なんてえらそうにゴメン。

少し行くと〇〇処刑の地の石碑。お上に首を刎ねられたがその後名誉回復、残念だけどよかったじゃん。

まだまだ大阪は暑い日が続くが、標高の高い山里は正直に秋の気配、葉が紅葉してきているし風も冷たい。夕方の人のいない鬱蒼とした林道は淋しい。さらにうえに10軒ほどの集落、“千枚田の里”と書かれている。昔個展の会場でこの絵の題名“棚田”に変えてほしいとどこかの御婦人。オレは“ダンダンバタケ”としていた。やはり今でも“ダンダンバタケ”がいいと思っているが、呼び名、言い方、表し方によってイメージが変わるのも面白い事かな。皆さんはどちらがお好きかな。黄昏になってきて牛舎のウシ君の顔もかすかにしか見えない。高級黒毛和牛ということもあって、闇夜のカラスで余計に見えないが、ガサゴソウシ君おやすみ。20.30枚ぐらいの千枚田の稲穂は、もう何時でも刈ってくれと実っている。

この町には、“神楽”“カルスト台地”と知らなかった、行かなかった処がある。カルスト台地は行けばよかったと残念。神楽はあちこちに写真があったが、コレもまた魅力いっぱい。次回だ。

0109 宇和島港 280912

港の突堤によくあるもので、船を繋留する鉄の杭？船からのロープを繋ぐ鉄のピン？（何という名と検索したら、石原裕次郎がポーズを取るときに片足を乗せる物、とは笑ってしまったが正解は“係船柱”と言う）あれが好きで何度か描いてやろうと挑戦したが、うまく描けたためしがない、というよりあの形の捉え方が難しい、何が難しいのかわ

て、素直に描けばおもしろい形と色なのにオレの心が歪んでいるのかな。そのピンの上に腰かけて宇和島港の海を見ていた。

初めての場所なので右も左もわからないこの突堤にも、鉄のピンがある。デカサは大きくないピンという事は、小さい漁船も外国航路の大きな船もこない、言ってみれば小ぶりのデカイ船と意味不明の言葉だが、そういう類の船がやってくる港なのだねと勝手に思った。突堤から外れたところに、下半分が黒、上は白、対の救命ボートはオレンジ色の塗装が真新しい船。背に BLACK DRAGON PANAMA と書かれている。パナマ船籍の黒龍号という処かな。貨物線だと思うが何を積んでいるのか、こんなところで。

ブンブンと漁船が入ってきて若者がコンクリートの上に籠を置き鯛を水揚げしている。50センチもありそうな鯛を5枚6枚と船底から取り出して籠に移した。よっこらしょと籠を抱かえてわっさかわっさかこちらに近づいてきた。ピンクのシャツにチョッキに半ズボン、顔を見ると熟年のおっさん、若づくりの漁師さんの足元は白長靴だ。冷蔵庫の建物から引き返して、今度は同じような大きさの、ハマチかカンパチと見える、キラリと光る魚体のしっぽをズイト掴み3枚4枚、またまたよっこらしょと籠を抱かえて、わっさかわっさか冷蔵庫の建物へ。四国のこの辺りの近海はまだまだ立派な大きさの魚がワンサカいるのかな、大漁だ。

こういう突堤に居て驚くのは海辺の人々が、何でもかんでもポイと海に棄てる。弁当を食い終わると残りの一式をポイ。一式とは何かといえばコンビニの袋、弁当箱、箸、ティッシュに、お茶のペットボトルと中身以外の全部だ。ポケットに入っているゴミをポイ、車の運転席に溜まったゴミをポイ、わざわざ建物から出てきて海に向かってジョロリンコ、向こうでもおっさんがジョロリンコ、オレもついでにジョロリンコ。

魚を保管する冷蔵庫の建物、氷をバラバラ吐き出す建物、魚を運ぶ発泡スチロールの箱満載の建物、その真ん中にある食堂に入った。海の荒くれあんちゃんが昼間からビールを飲んでいる。海鮮丼でも無いのかなとメニューを見たが、親子丼、天丼、焼き飯、ラーメンとはどうしたんだ。海の男は魚は食い飽きたのか、つまらないメニューである、つまらない焼き飯を注文したが味もつまらない。